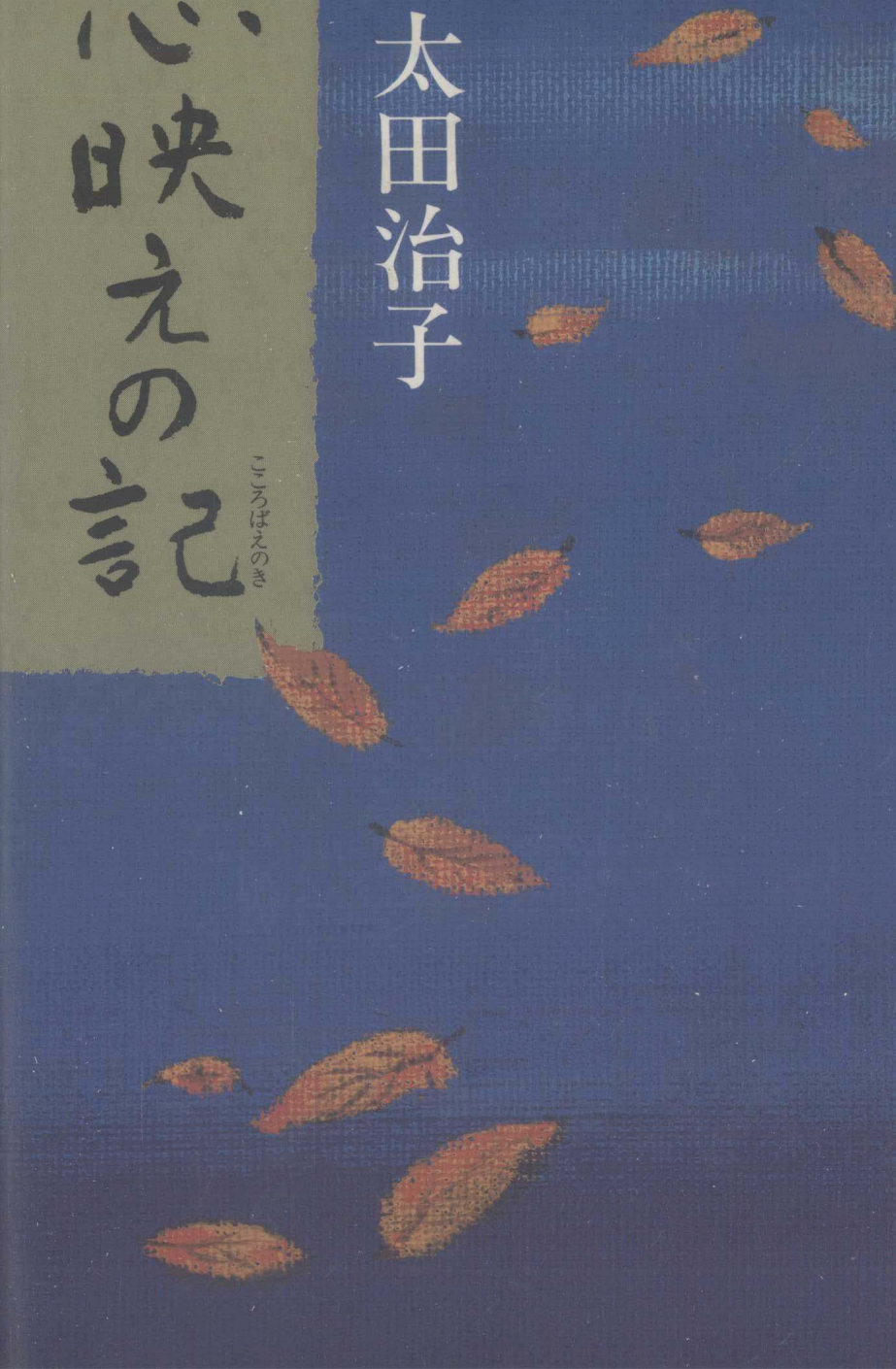


太田治子

心央えの言己

こころばえのき



心映えの記

太田治子

中央公論社

心映えの記

〇二五 換印廃止

定価二一〇〇円

昭和六十年二月二十日初版発行
昭和六十一年三月五日九版発行

著者 太田治子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

ISBN4-12-001368-5

日本音楽著作権協会(出)許諾
第八四六三一五七一五〇九号

心映えの記＊目次

悪しき心	7
古い写真	32
夜の電車	51
春の予感	73
秘密	94
指輪	118
ベランダの二人	141

夏の記憶

163

マリーの雨

184

静かな空

205

落葉

227

生誕

245

あとがき

268

装幀 熊谷博人

心映えの記

悪しき心

十一月十二日に、私は三十六歳になった。結婚したいと願いながら、どうしても恋人もできずにきてしまったのか。

「あなたは心映えこころはが悪いから、お相手が現れないのよ」

そういつて説教していた母は、昭和五十七年の十一月二十四日未明、肝臓の手術後一週間足らずして息を引き取った。あつけない死だった。あれから、ちょうど一年である。私は母が死ぬとは思っていなかった。手術をして、助かるのだとばかり思っていた。母は、自分の死を予期していた。それは、のこされた入院中のメモからもわかるのである。しかし、最後には希望を持つようになったのだと思う。遺書は、なかった。

あのように思いがけず母が死んだのは、娘の私の心映えが悪かったからかもしれない。

自分でもわかっていながら、どうすることもできなかった私の心の中の悪を、母は自らの死とともにそっくりあの世へ持ち去っていったような気がする。

「最近、とても明るくなった。生まれた時からずっと一緒だったお母さんが死んだというのに、どうしてかしら？」

よくそんなことをいわれる。自分の裸の心をすべてさらけだしていた母に死なれて、心の中の悪も死んだ。私が明るい顔をしてみえるのは、そのせいもあるのだった。

それでも、この一年の間に、心待ちする独身男性は現れなかった。心映えの悪さは、まだのこっていたのだった。しかし、それは少女のころから持ち続けていた悪の、ほんの小さなかけらだったのだと思いたい。

母が空の上にとびたつ時に、胸にしっかりと抱えた私の悪は、あまりにも大きくふくれ上がっていたためについぼろぼろとかけらがとびちって、それが再び私の胸のどこかにひそんでいたのかもしれない。

「太田さんは、性悪だ」

夏の終りに、ある男性からそういわれて、奇妙にうれしかった。彼は、私の心の中の悪を見抜いたのだと思った。

「それでは、結婚なんかできやしない」

そうもいった。それから、小さくつぶやくように、

「恋もできない女だ」

といったのだった。

妻子のあるその男性と、恋をしていたらどうなっていたのか。それは、わからない。母が自らの死と引き換えに私に与えてくれた心の明るさは、また、別の所から黒雲に覆われていたようにも思われる。しかし、もう逢わなくなったその男性を、なつかしく思う気持がある。それは、彼のいうところの「性悪」と、母から説教されていた「心映えの悪さ」が、同じものに思われたからだった。

「太田さんは性悪だ」という言葉で、心の中にカケラとして残っていた悪は消滅した。それですぐに、恋人が現れるとは思っていない。あの男性がいったように、恋も結婚もできないまま年老いていくのではないかという気がする。

なぜ、性悪かを、はっきりと口にするその男性に向って、「そんなことない、私はそんな女ではない」と、むきになって否定した。もしその相手が独身男性だったら、あるいはそんなことを口にせずに、私の前から無言で立ち去ったかもしれないかった。

男性の前で、私はいつも「お猫ちゃん」を続けていた。にっこりと穏やかな笑みを浮かべていたのである。

「太田さんは、いい人ですね。僕が独身だったらなあ」

そういう慰めとも励ましともつかない言葉を、今まで何人の既婚男性から聞いたことだろう。

「いい人」とは、一体なんなのだろう。おとなしくにつこりしていれば、「いい人」となるのか。きわめて自然に、男性を喜ばせる言葉をいえるならば、それも「いい人」なのかもしれない。いずれにしても、「いい人」は、実にアイマイな言葉に感じられるのだった。「性悪」という乱暴な言葉が胸にしみたのは、あまりにも「いい人」という言葉を聞き過ぎていたからでもあった。

私は、今まで一度として、自分を、「いい人」と思ったことはなかった。

それなのに、私は男性からも女性からも、「いい人」だと思われていたかった。「いい人」という言葉にこだわりを持ちながら、そう願っていた。「お猫ちゃん」を演ずることの快感もあった。「性悪だ」といった男性の前でも、最初は、「お猫ちゃん」を演じていたのである。しかし途中から、つい裸の心をぶつけることになっていった。

母が死んで、かつての母がそうだったように、私も人の目が気にならなくなった。この世の中に、恐れるものは何もないという変な度胸がついてきた。思いきり、正直に生きたいと考えるようになった。もはや、「いい人」と思われなくてもいいという気持になったのである。

る。いくら、「いい人」だと思われても、御縁は生まれなかった。それならばいいそのこと、どの人の前にもありのままの裸の心をさらけだそうと思う。

ただし、母の生きていたころの心映えの悪さについては、口をつぐんでいたかった。あまりにも恥ずかしい過去だった。

私の心映えの悪さが執拗なのに業を煮やした母は、

「もう、人にいってしまうからね。今までのこと、全部話しちゃう」

と、よくいった。私は途端にうろたえた。どんなことがあっても、話してほしくなかった。それが公表されると、今までの、「いいお嬢さん」「優しい孝行娘」という神話はたちどころに崩壊する。

実際に、母は何度か人の前で、そのことを話しそうになった。ひたすら狼狽している私をみながら、母はゆっくりと話題を変えるのであった。

あんなに恥ずかしかったあのことを、今これからありのままに話そうと思う。そのことで、今まで私を本当に、「いい人」と思っていた男性は、「なんだ、こんな女だったのか」と鼻白み、嫌悪するかもしれない。それでいいのだと思う。ウソいつわりないありのままの私をさらけだそうと思ひ決めたら、心は一層明るくなった。

「人をあざむくよりも、自分をあざむくことの方がくるしい」

私を生む八年も前に、愛のない結婚をして生後まもない娘を病気で死なせた時のくるしみを、母はそういつて教えてくれた。「お猫ちゃん」を続けていたのは、人よりも自分をあざむく行為だったのだ。

死なれてみて、母がいかに心映えのいい女であったかが、身にしみてよくわかった。妻子のいる作家との間に、私を生んだ母の心は、いつも明るかった。奥さまに申し訳ないといいながら、明るさは消せなかった。自分を裏切らなかつたからだと思う。

その母の明るさを、人にわかつてもらいたい。しかし、それにはまず、娘の私の心の中の暗さ、悪について話さなくてはいけない。

「ああ、これでまた、寿命が一年縮まる」

心の中の悪をぶつけるたびに、母はいった。声が大きい人は、長生きできるといわれている。声の大きい母は、八十過ぎまで生きるつもりでいた。齢六十九で死なせてしまった贖罪の氣持をこめて、いかに、心映えの悪い娘であったかを、ありのままに告白したい。

「心映え」とは、どういうことなのかと聞かれて、すぐには返事できない。「心ばせ」とか、「心だて」という言葉に、一番意味が近いように思うのだけれど、微妙に違う。

母は、「あなたは、心映えが悪い」といういい方をする前に、「あなたには、毒気がある」といっていた。

「いくら男性の前でにこにこしていても、賢い男性にはちゃんと、あなたに毒気があることがわかるのよ。それで御縁ができないのよ」

そういわれるたびに、毒気満々の女として坐っている自分の顔が浮かんできた。卑屈ないやらしい、妙に老けた女の笑顔だった。時として、写真にそういう顔で写ることがあった。しかし、「毒気がある」という言葉には、どこかユーモアが感じられもするのだった。

「この子には、毒気がありますでしょう？ 毒気満々の子なのですよ」

そう人前でいわれても、かえって狼狽しなかった。人は、母の思いがけない言葉に、あつけにとられた表情をする。決して、「毒気とは、何なのですか？」とは聞いてこないのだった。その相手の表情に、母はイタズラっ子のような満足感をおぼえるらしかった。

一方、母がしげしげと三十を過ぎた娘の顔をみながら、

「この子は、心映えがわるくて。それでいけませんのよ」

というと、人は必ず、

「それは、どうしてですか？」

と聞くのだった。

「毒気」という言葉よりも、はるかに柔らかな響きのあるその言葉の意味を、誰もが知っていた。

母が死んでから、

「どうして、結婚なさいませんでしたの？」

と何度となく聞かれた。そのたびに、母を真似て、

「それは、心映えが悪かったものですから」

と答えた。

母が同じ言葉を口にする時とは違って、その言葉の意味するところを聞いてくる人はいなかった。ほっとするとともに、何か物足りない思いがした。

そんなある日、

「心映え。いい言葉だな。おかあさんの心がこもっている」

という男性の言葉が返ってきた。生前の母を、知っている方ではなかった。私から母の話を聞いただけで、そういわれたのである。その通りだと思った。その時、これはどうしても自分の心映えの悪さについて告白しなくてはいけないという気持ちになった。

口にしたというには、あまりにも恥ずかしい。その勇氣はない。一言、いってしまったえば、なんだ、そんなことか、アホらしいで片づいてしまうもののようにも思われる。それだから、